

## 序

奈良朝寺院の最後を飾った西大寺建立とほぼ同じ頃、西大寺の東北に接して官の尼寺である西隆寺が建立されていた。この寺は中世には廃絶し、また再興されることもなかったのので、資料豊富な南都諸大寺に比べて、まとまった研究はほとんどなく、その詳細は不明であった。ところが、1970年代前半に西大寺駅周辺の開発に伴って西隆寺跡の発掘調査が行われ、金堂・塔・東門などが明らかとなった。その成果は『西隆寺発掘調査報告』（1976年）として刊行されている。

あれから20年。ショッピングセンターの増築や都市計画街路事業など西大寺駅周辺の開発が再び活発化し、当研究所が西隆寺の東回廊および東北部を中心として発掘を行うこととなった。その結果、寺地東北部では大形の建物が数回建て替えられていることが明らかになり、報告書はこの場所を食堂院と推定している。

寺院の発掘は、各地の国分寺や国分尼寺を含めても、伽藍中枢部の調査が中心であり、寺地周域部の建物配置が発掘調査によってこれほど明確になった例は少ないといえよう。最後に本調査に関して多くの関係者の御協力を賜ったことに対し、あらためて厚く御礼を申し上げます。

1993年3月15日

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉